日本語表現初年次における小論文序論の分析と考察

－2023 年度前期小論文を対象に－

近藤さやか、原美築、中村佑衣
KONDO Sayaka, HARA Mizuki, NAKAMURA Yui

1. はじめに（「日本語表現 1」科目の概要）

「日本語表現 1」は初年次を対象とした全学必修科目である。2023 年度前期は 2,118 名の履修者に対し、83 クラスの授業を開講し、15 名の教員で担当した。教員間で授業内容に統一性をもたせるため、オリジナルのテキストを使用し、解説マニュアルに沿って授業運営にあたっている。本研究では、執筆者の 3 名が担当している 6 クラスを研究対象とした。「日本語表現 1」の授業の到達目標は、「大学の学修に欠かせない 2 つの文章力（①事実を正確にかつ分かりやすく説明する力、②論理的に自分の意見を述べる力）」を身につけることである。この 2 つの文章力を身につけるために、授業内では 3 回の小論文作成を行っている。

本稿は 2 回目・3 回目に作成する賛否を問う形式の小論文を対象とした。受講生は、序論の第一段落に「話題の背景」を示し、段落末尾に、テーマに対して賛成か反対かという立場を表明する指定された構成で執筆している。2 回目・3 回目の小論文テーマは 2 年に一度変更されるが、2023 年度は「「新聞は必要ない」という意見に賛成か反対か」、「中学生がスマートフォンを所持することに賛成か反対か」というテーマを扱った。受講生が参考に検索するような小論文の書き方を説明したサイトでは、最初に自分の立場を述べるように指導していることが多く、立場の表明前に何を書けばよいのかわからず悩む様子が見受けられる。また、「話題の背景」を示した後にどのように「立場の表明」に接続したらよいか考え込む様子もある。序論の書き方は後期開講科目である「日本語表現 2」で執筆するレポートにもつながることをあわせて、本稿では指導方法を考察する。

2. 本稿が問題とするところ

研究論文のガイドラインである、通称「シカゴ・マニュアル」（ケイト・L・トゥラビアン 2012）には、序論の要件がまとめられている。そこでは序論の構成が、①書き手の研究課題が従来の研究の文脈において、どのように位置づけられるかを示し、②前項の情報をふまえた上で、先行研究の欠点や解決されていない課題等から書き手が立てた「問い」を提示し、③「問い」自体の重要性や価値を説明した上で、④結論に至るまでの手段や手順、あるいは論文全体のアウトラインを描き出す、と解説されている。先述した、本科目の小論文課題において序論の中心文にあたる立場表明が序論末尾に位置しているのは、上記の構成に沿ったためだといえるだろう。

以上の構成は、研究論文においてのみ要求されるというものでもない。本科目で扱うような簡易的な学術的文章においても、そうした要件を「論文の理想形」としつつ、受講生の実状に合わせた段階的な指導として反映させることが肝要である。その前提のもと本年度中の各自の指導を振り返った際に、本稿執筆者からは、それぞれ異なる問題意識とキーワード（「序論の接続表現」、「語彙」、「型の提示」）が示された。次章より、それらに対する調査と分析を行う。

3. 調査と分析(1)—序論の接続表現—【原】

本章では、受講生が実際に執筆した「日本語表現１」の小論文（2・3 回目）の序論本文を「接続表現」に着目して分析し、受講生が抱える問題点の明瞭化を目指す。本章の分析対象は、交流文化学科 2 クラスである。

当該クラスでは、「テーマの概要を理解した上で、それを読み手に伝わるように書く」ことをねらいとして序論の指導をしている。これは、いきなり立場の表明をするのではなく、そもそも「なぜ、そのテーマについて考察する必要があるのか」という価値を序論で示せるようになることを目指すためである。

これを達成するために、2023 年度前期の講義においては、2 回目の小論文を執筆する段階で、序論に「テーマに関する社会的な動向」を示すようにのみ指導した。この時点で文章の型は提示していない。これは、同じ形式で執筆する 3 回目の小論文に向けて、一度は受講生自身で試行錯誤し、気づきを得る経験をさせるためである。

3 回目の小論文を執筆する段階では、序論に「よって、そのため、したがって」といった順接の接続詞を使用しないように伝えた。これは、2 回目の小論文作品に(1)のような序論と本論の内容が重複した不適切な文章が多く見られるためである[注1]。

(1) 新聞はどんな状況でも安定して人々に情報を届け

てくれる。2011年の東日本大震災でも実際に手書きの新聞が発行され、人々に情報を伝え続け励まし続けたという例がある。よって、「新聞は必要ない」という意見に反対である。

災害時でも新聞から情報を得ることができる。インターネットは…

このような「本論に書くべき書き手の意見を序論に書いてしまっている」文章を避けさせるために、順接の接続詞の使用を3回目で禁じている。代わりに、以下に示す(2)(3)を例として提示している。

(2) 新聞購読者数は年々減少している。新聞通信調査会の調査によると、2008年度全国で88.6%だった月ぎめ購読者は2021年度には61.4%と27.2ポイント減少した。この調査から、新聞を必要とする人が減少していることが分かる。しかし、「新聞は必要ない」という意見には反対だ。

(3)総務省によると2020年のインターネット(以下、ネット)の利用率は83.4%である。ここから8割以上の人がネットから多く情報を取得していることが分かるが、新聞から得られる情報も多い。本小論文では、新聞とネットの情報量に注目して「新聞は必要ない」という意見に反対の立場で述べる。

ここにある(2)を提示する際、「1 つのテクニック」として、「書き手に不利な情報をあえて示し、逆接表現を使用して自分の立場を表明する」方法があることを解説している。

これらの指導の結果、受講生の小論文の序論が2回目から3回目にかけてどのように変化したのか、序論に使用されている接続表現を取り出し分析したのが、以下の表1・表2である。

表1　2回目小論文作品における序論の接続表現

	順接	逆接	N	なし	他	計
数	**22**	16	1	14	3	56
割合	**39%**	29%	2%	25%	5%	100%

表2　3回目小論文作品における序論の接続表現

	順接	逆接	N	なし	他	計
数	**6**	**24**	**12**	**13**	0	55
割合	**11%**	**44%**	**22%**	**24%**	0%	100%

表1・2の結果から、2回目から3回目に「順接」表現を用いた序論が大幅に減少したことが分かる。代わりに、(2)で示した「逆接」表現を用いた作品が増えている。また、表中の「N」の項目も大きく数を伸ばしていることが分かる。これは、(3)のように、本論で述べる観点を示しつつ、ニュートラルな形でテーマの概要から立場表明につなげられているパターンの小論文である。本章筆者が担当する授業では、序論において本論で取り上げる「観点」の明示は必須要件としていない。それにもかかわらずこの項目が増加したということは、提示された序論例(用例(3))に倣って序論を書ける受講生が多くいることを示しているといえる。

一方で、「接続表現なし」の作品数は2回目と3回目でほとんど変化がない。ここに分類される小論文は、(4)にあるように、「内容的に順接でつなぐべきところの接続詞を単純に抜いただけ」となっているものが多い。

(4) 2022年の内閣府の調査によると、中学生のスマートフォン(以下、スマホ)の所持率は約9割に上る。スマホは生活に欠かせないものである半面、容易に犯罪に遭遇する道具でもある。「中学生がスマホを所持すること」に反対だ。

スマホは犯罪被害への入り口となる。警察庁によると…

(4)は、(1)と同様、序論の内容と本論の書き出しが繰り返しになっている。したがって、「順接の接続詞を使用しない」という指示を強調したとしても、「序論では自分の意見ではなく、テーマの概要を読み手に伝える」という主旨が理解されていないケースが少なくないといえる。

この問題点を解決するには、順接の接続詞の使用を禁ずる指示を出すのではなく、小論文における序論の目的として本章筆者が掲げている「テーマの概要を読み手に伝えること」を理解させ、その目的を達成するために必要な情報の中身を考えさせる必要があると考える。

4. 調査と分析(2)—語彙—【中村】

本章では、前章に示した問題点の解消に対する適切なアプローチを見定めていく。本章の分析対象としては「日本語表現1・2」共に必修科目として設定された創作表現専攻の2クラスを取り上げる。

当該クラスでは、「日本語表現1」の段階で「日本語表現2」の最終課題(レポート)を見据え、序論の機能や構成を指導する。本科目のライティング課題(小論文・レポート)では10点を満点とし、それを「読解」や「構成」「論証」などの細分項目で振り分け、減点方式で採点するが、その際に「日本語表現1」で差がつくのが「構成」だ。当該クラスの場合、その減点の要因は、前章同様の序論の接続表現や、文と文の接続の不十分さにある。

受講生が各課題の「構成」(3点満点)で獲得した点数の割合(小数点第3位以下切り捨て)は、【2回目小論文(47名提出)】1点:53.19%(25名)、2点:44.68%(21名)、3点:2.12%(1名)、【3回目小論文:43名提出】1点:65.11%(28名)、2点:27.90%(12名)、3点:6.97%(3名)、【レポート:43名提出】1点:11.62%(5名)、2点:41.86%(18名)、3点:46.51%(20名)である。「日本語表現1」で「構成」が1点であった受講生は半数を超えるが、「日本語表現2」では半数近くが満点を獲得している。各項目の点数は、受講生側で、「苦手としており、

復習を要する項目か否か」の目安がつけられるように、相対的指標として機能する面が強いため、先の調査からは受講生が後期中に「構成」の不十分さを克服したように見える。しかし、その判断は正しいだろうか。接続詞等の適切な運用力が成長した場合には、同様に学生自身の言葉の知識面にも成長が見られるはずだ。その点を明らかにすべく、小テストに光を当てた。

「日本語表現 1・2」では 5 点満点の小テスト(注2)を各 6 回実施する。授業外の自習を要するが、難易度は高校卒業程度であり、満点を取ることは難しくない。

表 3　小テストのクラス別平均点

	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目	6 回目
N1：A	3.73	2.73	2.76	3.08	3.08	3.48
N1：B	3.86	2.86	2.52	2.91	2.69	3.42
N2：A	3.91	4.34	3.04	4.13	3.56	2.95
N2：B	3.43	3.52	2.54	3.69	3.82	2.52

表 3 に示したとおり、「日本語表現 1（N1）」の平均点は、2 回目「対義語・類義語」・3 回目「同音・同訓異字」が A・B クラス共通で 2 点台、4 回目「誤字訂正」・5 回目「送り仮名」が 3.08 点以下である。一方、「日本語表現 2（N2）」では、類義語・対義語・上位/下位語・謙譲/尊敬語などを書き分ける 3 回目「二語の関係」で 3.04 点以下、6 回目「誤字訂正」が 2 点台だ。「日本語表現 1」の 4 回目「誤字訂正」が、「日本語表現 2」の 6 回目「誤字訂正」よりも高い平均点を示したが、理由は問題形式の違いにあるだろう。「日本語表現 1」は「カタカナ部分を漢字に改める」という単純な書き取り問題の形式であるが、「日本語表現 2」は「1 文の中から受講生側で誤字を探して書き直す」という問題形式である。「日本語表現 2」には「同音異字」の見分けが必要になるため、難易度が上がると考えられる。また、「日本語表現 1」の第 5 回「送りがな」の平均点の低さについて、送りがな指導の改善を目指した井上（2007）により、送りがなの誤答には「同訓異字」「学習者の語彙」「使用頻度の低さ」を含む 8 つの要因があるとの指摘がなされている。以上の調査からは、受講生が一貫して、複数の語から適切な 1 語を選び取る要素を含む問いに弱い様子がうかがえる。換言すれば、語彙の貧弱さが浮き彫り(注3)になったのだ。

小テストの分析により、語の適切な運用力自体が自然と急成長した可能性は低まった。ではその場合、「日本語表現 2」で語彙を補えた理由は、課題執筆までの過程にあるのではないだろうか。「日本語表現 2」のレポート執筆前には、レポートと同一テーマのグループ発表のために共同作業（スライドや台本を作成）を経験し、レポート執筆の際にはテキストの作成例を手本とする。つまり、様々な形で「例示」に触れる機会があるのだ。反対に、「日本語表現 1」のテキストには、接続詞の一覧はあるが運用面の解説まではない。以上の事柄を勘案し、語彙の貧弱さ（「構成」力の不足）を補いつつ、接続詞等の適切な運用力における受講生自身の主体的成長を促すためには、接続詞等の運用が想像しやすい複数の例示が良い契機になると推測する。

5. 調査と分析（3）―型の提示―【近藤】

本章では、前章で示された序論の型を例示する際に必要な要素を考察する。分析対象として「日本語表現 1・2」共に必修科目として設定されたグローバルコミュニケーションの 2 クラスを取り上げる。序論に関係した問題点は、後期の「日本語表現 2」の課題での論点・争点の紹介が唐突に記されることである。「日本語表現 2」の引用の仕方を学修する際の課題文で、「話題の背景」から書き始めるように指示しているにもかかわらず、引用文から書き始める例が 51 名中 18 名（38%）あった。また、グループ発表前に行う中間報告でも、テーマの概要から争点を定めるグループが散見された。例としては「高齢ドライバーをめぐる問題」のテーマから「免許返納をめぐる議論」へと争点を早々に絞ることが挙げられる。これは、「日本語表現 1」での小論文の序論から指導し、改善していきたい問題である。第 2 章で紹介した「シカゴ・マニュアル」の序論要素は最終的に目指すものではあるが、「日本語表現 1」の小論文の序論指導の段階としてどのように伝えると学生に分かりやすいかを考察した。

三森ゆりか（2013）『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』によると、序論に必要な 4 文メソッドは以下の 4 点と示されている。1. 最初の一般的な内容の文、2. 背景情報、3. 中継・橋渡し、4. 論題である。一般の話題から入り、固有の話題へ移る逆三角形で構成することが望ましいとされている。これを「日本語表現 1」で執筆する 2・3 回目の賛否を問う形式の小論文に入れるべき要素として置き換えると、①一般論②背景③中継④論点の提示となる。ここでの一般論は既知情報の確認、背景はデータを必要とする類の状況を想定している。「日本語表現 1」の 2 回目・3 回目の小論文執筆時には、本論で観点とすることについての前情報となることを書くようにとのみ伝えてある。2 クラス分の序論例を 4 要素に分けたものが表 4 である。

表 4　小論文序論の 4 要素割合

	一般論	背景	中継	論点の提示
小論文②（58 名）	19 **(33%)**	44 (76%)	23 (40%)	18 (31%)
1 要素のみ	7%	7%	0%	5%
小論文③（56 名）	8 (14%)	53 **(95%)**	41 (73%)	30 (54%)
1 要素のみ	2%	5%	0%	0%

2 回目は日常生活をテーマとした「「新聞は必要ない」という意見」に賛成か反対かという小論文である。しかし、学生にとって新聞が身近なものではない現状を反映して、新聞の特徴を説明する一般論が書かれることがある。一方で、3 回目の中学生のスマートフォン所持の賛否を問う小論文では、「中学生」「スマートフォン」についての説明をする一般論が書かれることが少ない。学生たちの経験から「中学生」「スマートフォン」は既知のものであるため、それらがどのようなものかという既知情報は省かれ、所持率を説明する背景から書き始める例が非常に多い。一般論として対象のどのような面に注目するのかを示す意識がないためだと推察できる。

一般から固有の情報へと徐々に範囲を狭めていく逆三角形で書くことが望ましい序論においては、既知情報の確認を行う一般論を添えることで読み手に本論を伝えやすくなることを指導する必要性がある。

6. 各改善点を踏まえた指導案

以上、それぞれの調査分析によって、現状の指導において「テーマの概要を読み手に伝える」意識を定着させること、語彙の貧弱さや「構成」力の不足を補足すること、既知情報から書き始める構成意識を育成することが改善点として挙げられることを述べた。

これらを改善するための指導案として、2 回目の小論文の草稿を執筆する回において、複数のタイプの序論例を示す実践を提案する。ここで用いる序論例は「レポートにおける序論例」と「「日本語表現 1」の小論文課題に応用しやすい序論例」の 2 種類である。

まず、オモテ面には、「レポートにおける序論例」を 3 例載せる。これは、受講生に「日本語表現 2」の学修も見据えて、「レポートにおける序論とは何なのか」、「序論に必要な要素とは何なのか」を意識させるためである。「日本語表現 1」の小論文においては、テーマの性質や字数制限の関係で、レポートに必要な全ての要素を満たした序論を書くことは難しい。しかし、「理想像」を示すことで、序論とは何なのかをイメージしやすくなると考える。また、「日本語表現 1」の授業だけでこのレベルに到達することは難しいと感じさせることは、後期の「日本語表現 2」を履修するためのモチベーションとして働くことも期待される。

しかし、それのみでは日本語表現が不得意な受講生にとって「使いにくい例」に感じられることが予想される。そこで、ウラ面には「その年度で使用しないテーマの小論文の序論の良い例」を示す。第 1 章で示した通り、「日本語表現 1」の授業では 2 年ごとに小論文テーマを入れ替えている。そこで、その年度で使用しないほうの例、2024 年度であれば「「新聞は必要ない」という意見に賛成か反対か」、「コンビニのレジ袋有料化に賛成か反対か」の序論例を示す。いずれも「賛成/反対」の立場表明を行うタイプの小論文テーマであるため、受講生たちはウラ面にある序論例を参考にしながら、「小論文の序論にはどのような内容の情報を入れると良いのか」、「それを伝えるために、どのような語彙を使用し、どう文章を構成すれば良いのか」を考えることができるはずである。

本学の学生の強みとして、「見本となる型がある場合、それによく当てはめて文章を執筆できる」ことが挙げられる。その強みを活かせるよう、具体的な「小論文における序論の型」を示しつつも、より高い次元である「レポートにおける序論の例」も挙げて、後期開講の「日本語表現 2」の学修につなげるのが、この指導案の目指すところである。2024 年度は、実際にこの「序論例」を用いて授業を実践し、その効果を見ていきたい。

注

1 第 3 章で示す用例は、受講生の小論文の一部を抜粋し、表現の一部を筆者が加筆修正したものである。

2「日本語表現 1」の小テストのテーマは、1 回目「漢字の読み取り」、2 回目「対義語・類義語」、3 回目「同音・同訓異字」、4 回目「誤字訂正」、5 回目「送りがな」、6 回目「漢字の書き取り」であり、「日本語表現 2」のテーマは、1 回目「敬語表現」、2 回目「文法表現」、3 回目「二語の関係」、4 回目「適切な表現」、5 回目「ことばの意味」、6 回目「誤字訂正」である。

3「日本語表現 1」の小テストについて、2021 年度はコロナ禍により従来と異なる形式となったため分析不能。2022 年度の平均は 21 年度に比べ、全体的に 0.5 点程度上回るが、22 年度内の各回を見比べると、第 2・3・5 回が他回よりも平均点が低かった。また、「日本語表現 2」では 21、22 年度共に、2023 年度と同一の苦手傾向を示した。以上の事柄を考え合わせると、相対的に苦手とされる「語彙の貧弱さ」は 2023 年度の受講生特有の結果ではないといえる。

参考文献

(1) 愛知淑徳大学初年次教育部門（2023）『日本語表現 1　第 15 版』愛知淑徳大学.

(2) 愛知淑徳大学初年次教育部門（2023）『日本語表現 2　第 13 版』愛知淑徳大学.

(3) 井上次夫（2007）「送り仮名の誤答分析－誤答例を用いた送り仮名指導に向けて－」『小山工業高等専門学校研究紀要 』第 39 号，pp. 1－10.

(4) ケイト・L・トゥラビアン(2012)『シカゴ・スタイル研究論文執筆マニュアル』ウェイン・C・ブース他改訂, 沼口隆・沼口好雄訳, 慶應義塾大学出版会, p. 152.

(5) 三森ゆりか（2013）『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』大修館書店，p. 174.